

2 1 世紀の日本のかたち（3 1）

随想 — 平城京遷都 1300 年 —



戸沼幸市
〈(財)日本開発構想研究所 理事長〉

古都奈良の景観

「あをによし 奈良の都は 咲く花の にほふがごとく 今盛りなり」と詠われた古代国家の黄金時代日本の首都平城京は最盛期には人口10万人とも20万人ともいわれ、さぞ活気に溢れ、賑わっていたに違いありません。

710（和銅3）年、藤原京から奈良の地に遷都してより、今年2010（平成22）年で1300年になりました。これを祝って奈良では平城遷都1300年祭が行われています。

1300年前、二官八省の官僚を引きつれた天皇は、天子の座、大極殿から眼前に広がる新都を高揚した気分眺めたことでしょう。唐の長安を二重写しにして。

平城遷都1300年祭の主会場、平城宮跡（東西1.3km、南北1km、面積130ha）はまるごとユネスコの世界遺産に登録され、大極殿と朱雀門が朱色に復元されておりました。

広い会場には1300年前の国づくり、都づくりの映像資料を展示する平城歴史館、復元された遣唐使船もあり、“せんとくん（Sentokun）”を旗印にボランティアのガイドさんにサポートされた大勢の見学者でにぎわっておりました。

この夏の日、私も久しぶりに古都奈良を訪れました。

大極殿に立って前方を見わたすと、ずっと向

こうに朱雀門が見えましたが、視界をさえぎって京都と奈良をつなぐ近鉄奈良線の電車が横切っていました。



復元された大極殿

現在の奈良の街はかつての平城京を埋め尽くすように薄く地面一杯に広がって、千年の都を覆いかくしております。

平城京の格子に組まれた区画街路—東西方向の条と南北方向の坊、大路・小路も自動車時代の道路に組み換えられて、今や見分けるのが難しい状態です。広幅員の柳並木の朱雀大路も建物などに埋められています。とはいえ、平城京の存在していた地域は歴史的風土特別保存地区に指定され、建築制限が布かれており、地下に眠る遺跡に障る硬い建物が出来にくい仕組みになっているのです。併せて奈良市は、ごく一部を除いて建物に地上31mの高さ制限を課しており、全体として平面都市の姿を保っております。

31m—100尺は、ほぼ平城京の寺院の塔の高さ

です。奈良の市街地には要所要所に千年を生き抜いている寺院がありますが、100尺の塔は今も奈良一番の高さであり、美しい景観、シルエットをつくりだしています。

平城京は奈良盆地の北辺に位置し、北に平城^{なら}山、東に三笠山、西に生駒山と三方が山に囲まれており、この山並に寺々の三重、五重の塔が美しく映えるのです。古都平城京の面影、景観を伝えているのは宮ではなく、1300年の昔の区画に保持されている寺院群に違いありません。

今回、私も東大寺、興福寺、薬師寺、唐招提寺、そして元興寺を訪ねました。これらはいずれも春日神社とその神域とともに世界遺産になっている古都奈良の歴史空間です。

千年の寺々

奈良の千年の寺々には意図、主張が感じられます。

東大寺は大仏を包む堂々たる建築であり、1300年前の当時として人々が創り出す最大、つまり「大きさ」の表現に取組んだ典型といえましょう。



東大寺

興福寺は今も「古色の五重塔」を持ち、そのスカイラインに古都を表しております。創業から百年を超える木造の奈良ホテルからこれがよく見えるのです。



興福寺

南の薬師寺にも東塔、西塔の二つの三重塔があり、東塔は遷都1300年祭が終わるこの11月から解体修理が始まり、当分は見るができなくなります。歴史的建造物の保存は関係者の並大抵ではない努力によるものですが、薬師寺では「現代」を取入れる経営方針に感心しました。広い境内で週末、現代音楽のライブがおこなわれるとか、その舞台作りがなされていました。玄奘三蔵院には故平山郁夫さんの大唐西域壁画—高昌古城、嘉峪関やヒマラヤ、ガンダーラなどを描いた大きな壁画が収められておりました。



薬師寺

唐招提寺は薬師寺とは異なり、できるだけ「古代」を持続しようという構えを感じました。苔が美しい鑑真のご廟、涼しげな緑の木立を背に、唐風が木造和風に読みかえられて落ち着いた姿です。この空間には深い「精神性」を感じます。



唐招提寺

奈良町にある元興寺は「人肌の寸法」で出来ている木造建築ですが、1300年前の材料の一部がそのまま残っていると、ゆっくりと「千年の時」を受取った佇まいが感じられました。



元興寺

平城京は日本の宮都であったに違いありませんが、寺々のまち、仏教を最大限に活用し表現した都市であったと思われます。そしてそれが今の奈良を特色づける重要な景観となっているのです。



夕暮れの復元された大極殿

寺院巡りの後、草地のままの平城宮跡の背面

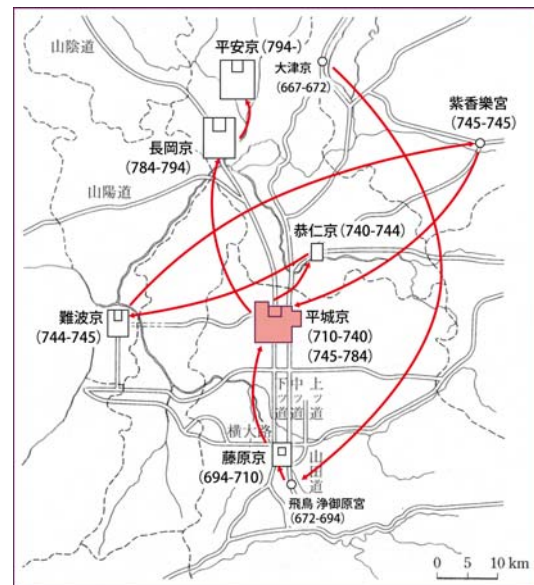
に廻って、暮色に包まれた影絵のような大極殿のシルエットを眺めると、ようやく古代の都平城京を垣間見た気分になったことでした。

平城京にみる古代国家と首都づくり

大化改新に始まる日本の古代国家建設とは、地方、地域に生まれた有力集団、大豪族に対し、天皇を中心とする朝廷豪族が優位を確立してゆく経過と読取ることができます。これを空間的にみれば、支配領域統合の中心点、天皇の居所（宮）の場所が特段に重要となるわけです。

大化改新の始まる前期難波宮（難波長柄豊碓宮）づくり（645年）、一つの権力闘争、壬申の乱のあとの飛鳥浄御原宮への移都（672年）、より安定した体制を空間化した藤原京への遷都（694年）、そして、平城京遷都（710年）につづくのです。

遷都の歴史（藤原京から平安京まで）



注：日本建築史図集 新訂第二版に加筆作成

「宮」から「京」へ、政治中心はより大きな空間を求めてゆくのですが、これは国の政治的制度的明確化、充実、確立と同時進行のものです。

日本の古代国家は唐の制度をモデルとし、政

治、社会体制として律令制度をめざしたものですが、この律令国家の基本構造は、第一に二官（神祇官、太政官）八省（中務省、式部省、治部省、民部省、兵部省、刑部省、大蔵省、宮内省）の階層的宮人一官僚組織を整えること、第二に広域地方行政単位として「国」を想定し、国司をおき、統治領域として日本列島（本州、四国、九州）を首都圏たる「畿内」と七道（東山、東海、南海、西海、北陸、山陽、山陰）にくくることでした。

古代の日本は稲作をベースとした農業社会であり、農業の生産力が向上することによってイナカ（村）に対してミヤコ（都）が生まれる時代でした。

奈良時代の人口は諸説ありますが、8世紀600～700万人と推定されています。日本全体の生産性の向上の上に人口増があり、これを政治体制化して国家（人民、国土、統治機構をもつ）づくり都づくりが行われてゆきました。

平城京の都市計画

710（和銅3）年、奈良の都—平城京は元明天皇を迎えて藤原京から遷都されました。途中で朝廷の内紛があり休都（740～745年）もありますが、この地は七代の天皇、74年の都でありつづけました。そして古代国家の中心舞台として、天平文化の華を咲かせたのでした。

平城京（東西5.9km×南北4.8km）は奈良盆地の北部に位置をとり、北に平城宮を設定し、ここから堂々たる中心軸（朱雀大路）を南下させ、大路・小路を格子に組んで土地を掴まえ、東西に左京、右京および外京を展開しています。

この格子型平面プランは、当時最大級

の国際都市、唐の長安や北魏洛陽城等を模したものとされており。都市のかたちだけでなく、それを支える理念、思想もまた唐の影響を強く受け、玄武（北）、朱雀（南）、青龍（東）、白虎（西）と方位を重視しております。

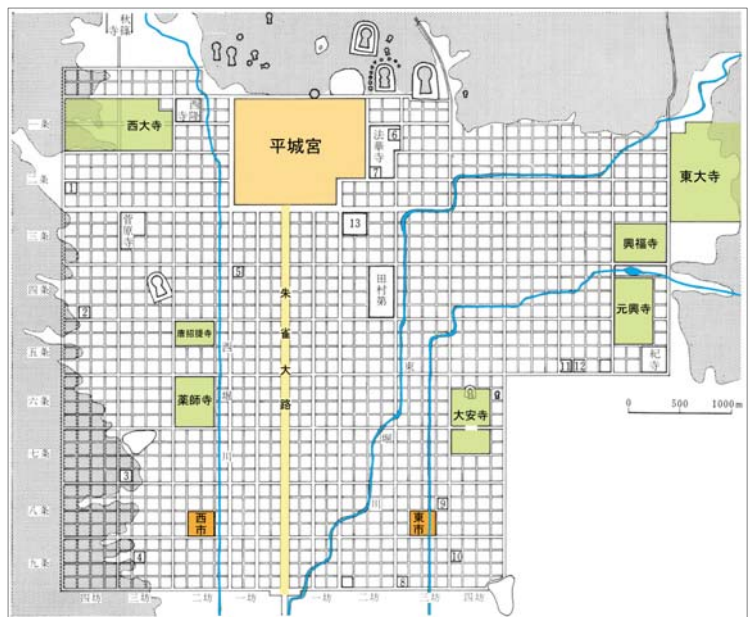
そして、都づくりは寺院づくりと一体のものとして行われました。

寺院は、国家の安寧、平和と繁栄を願う権力の権威づけとして不可欠のものでしたが、同時に天災、地変、不作、疫病に悩む民衆支配の重要な装置でもありました。

平城京の推定人口については、4、5万人から20万人まで諸説あるのですが、天皇、豪族、僧侶、宮人、兵士、民、奴婢とその家族、そして来京者を含めて最盛期は相当な人口であったと想像されます。仮に10万人としても当時としては大都会です。

平城京の南の左右のブロックに、西市と東市が設けられていますが、通貨として和銅銭も出回っており、これは都市の商空間の始まりです。

平城京復元図



注：「日本建築史図集 新訂第二版」に着色作成

平城京は道路（大路、小路）、水道（上下水、井戸、堀割）、ゴミ処理など、都市計画上興味深い点が多いのです。道路には排水のための側溝もあり、立派な断面です。平城京の中に幾筋もの川（秋篠川、佐保川、能登川、岩井川など）が入り込んでおり、これらのいくつかを整えて物資の運搬に活用した様子です。この水はまた都市の気候調節に大いに役立ったはずですが、もちろん、太陽エネルギーの都市であり、月は平城京の夜の照明であったことでしょう。

これら都づくりは、近郊及び諸国からかき集められた人力によるものですが、そのノウハウは遣唐使が持ち帰った情報と渡来人の技術でした。東アジア圏の文化交流が既に始まっていたのです。

平城京が廃都になった理由は、増大する人口に対してゴミ処理など、都市環境面で行き詰まったという説があります。これについては不明ですが、廃都の時には大路小路の側溝はゴミで一杯であったという記録が残っております。

平城京は日本に生まれた最初の都らしい都でした。しかし古代の日々を華やかに演じた奈良の都にも人民の困窮、寺院勢力の増大、政権をめぐる権謀術策が渦巻き、腐敗墮落の陰が現れて花の色香も失せ、やがて長岡京を経て、平安京へ遷都されるのでした。

東京遷都1300年のイメージ

1868（明治元）年、京都から天皇を迎えて首都となった東京は、明治、大正、昭和、平成と遷都142年です。東京都心にある首都機能（皇居、国会、政府、最高裁）は少々の波乱を含みながら、現在、ひとまず健在です。

さて、今後100年、200年、1000年と東京は首都であり続けているのでしょうか。

おりしも日本は大きな転換期を迎えております。日本人の劇的人口減少、国家のグローバル化、地球温暖化による自然災害要因の高まりなど、日本国家全体に対して、大きな変動要因が現れています。

国家財政は危機的であり、国の行政についても地域主権論が高まり、広域行政のあり方として道州制などが広く議論されております。呼応して中央政府の権限縮小、国会議員の定数削減など、いくつもの公党が党是に掲げるまでになっています。東京直下型の地震も予想され、首都機能移転の議論も消えていません。

日本の近未来、21世紀の日本の行方に何らかの変革が迫られていると感じます。

今年7月に行われた参議院選挙も政治として、これをいかに受け止めるべきかの右往左往でした。

21世紀を過ぎ、22世紀の日本の人口は4,000万人台に入るという予想もあります。この事態で巨大都市東京もすっかり縮体し、林立していた超高層も役割を終えて空き家となり、高密過密であった市街地は方々が空地となることでしょう。そこに首都機能だけがポツンと残っている図になるのでしょうか。

平城京は1300年を生き抜く知恵として、千年の時間を超える寺院を残しました。現代文明の最先端都市東京の、これに匹敵する建築ないし思想とは何でしょうか。

「生態系」という概念に一つの答えがあるのかもしれない。

2010年の夏は、アフリカ大陸で行われたワールドカップ、国境を越えた若い肉体の縦横な交叉、躍動に見入った暑い夏でした。

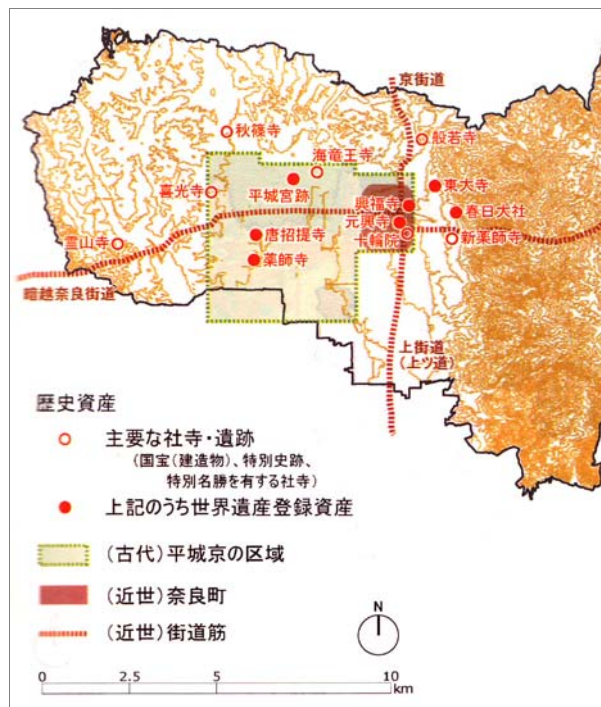
(2010.07.15)

平城京の立地する奈良盆地の地形



注：「奈良景観計画」より抜粋

平城京と主な歴史資産



注：「奈良景観計画」より抜粋

平城京模型



奈良市役所・庁舎のロビーに展示されている「平城京」の模型

縦5m・横6.5m、縮尺千分の一。高さ方向は、視覚効果を高めるために、1.2倍になっています。

【注】

文中に掲載の写真は戸沼撮影。

【参考文献】

- ・『奈良景観計画』奈良市都市整備部まちづくり指導室景観課 平成22年3月
- ・『日本建築史圖集 新訂第二版』日本建築学会編 2010年 彰国社
- ・『遷都論』戸沼幸市著 1988年 ぎょうせい